

前 奏 黙想	祈 禱
讃美歌 54 よろこびの日よ	讃美歌 361 主にありてぞ
祈 禱	献 金
信仰告白 使徒信条 566	讃 詠 547 いまささぐるそなえものを
聖 書 哀歌 4:2	黙 禱
コリントの信徒への手紙二 4:7	主の祈り 564
讃美歌 286 かみはわがちから	讃 詠 546 聖なるかな、せいなるかな
説 教 『イエスもまた土の器』	祝 禱 後 奏

「わたしたちは、このような宝を土の器に納めている(Ⅱコリント 4:7a)」。「このような宝」とは何か。「イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光(4:6)」だ。それを私という土の器に納めている。土感ある器といっても、縄文の火焰土器や室町期の備前焼とは違う。思い浮ぶのは、若い頃インドの道端で飲んだチャイの器。客は飲み終ると器を投げ捨てて割る。使い捨てられる土器カップ。あんな安価で脆い器である私たちに「神の栄光を悟る光」が納められている。実に印象的な表象ではないか。

「わたしたちは土の器」。教会内でよく用いられる表象。キリスト者はいわば謙遜の意味で、自分をそう称するわけだが、こうした自己表明にはどことなくひっかかるものを感じる。このかすかな違和感は何なのか。コリント後書の聖句をじっくり黙想して、ひっかかっている何かを探してみよう。

「この並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものではないことが明らかになるために(4:7b)」。無論「宝」が、私たちの行為や努力で得たものでないことは知っている。しかしそれでも、善行や信仰の報奨として何かしら「私が獲得した」と勘違いする者は少なくない。それにしても「わたしたちから出たものではない神の偉大な力」とは何であろうか。土の器として「死ぬはずのこの身にイエスの命が現れる(4:11)」こと。私たちは「いつもイエスの死を身にまとっている。イエスの命がこの体に現われるために(4:10)」。「イエスの命」とは何か。「主イエスを復活させた神が、イエスと共にわたしたちをも復活させる(4:14)」神の命。そしてあくまで「イエスと共に」起こる。

共に復活させられる私たちはイエスと一体化する。「宝を土の器に納めている(4:7)」がごとくに、私とイエスは一つなるものにされる。それでは、あくまで宝としてのイエスを、私たちという土の器に納めるのか。そうであろうが、キッパリ言いきると、どうも取り逃がしている感が残る。土の器は「いつもイエスの死を身にまとっている(4:10)」。まとっているのは十字架での無残な死。イエスは、路上でチャイの土器カップが割られるような死に赴いた。あっ、そうなのか、と改めて気づかされる。

イエスこそ土の器ではなかったか。「わたしたちは宝を納めた土の器(4:7)」なのだとなんか気づく以前に、イエス御自身が土の器になられた。「神の似姿であるキリストの栄光(4:4)」という特別待遇なしに、使い捨ての器となられた。だから私たちは、土の器としてイエスの死と共に、イエスの命をこの身にまとい得る(4:10)。そう思い巡らせると、もう謙遜の徳として「わたしは土の器」などと簡単には言えまい。確かに私たちは土の器だが、その器にもイエスの死が優先してあるのだから。

「尊いシオンの子ら、金にも比べられた人々が、なにゆえ、土の器とみなされ、陶工の手になるものとみなされるのか(哀歌 4:2)」。「土の器」とみなされる惨めさ、土の器には主体性が与えられず陶工の意のままにされる。「お前は鉄の杖で彼らを打ち、陶工が器を砕くように砕く(詩編 2:9)」。このような土の器に宝が納められている(Ⅱコリント 4:7)。著者パウロはかつて土の器の対極にいたが(フィリ 3:5~6)、土の器こそが救いだと大転換する。弱さのまま、欠け多きまま「神の栄光を悟る光」を納めた土の器であることの深い安堵。いつの日か崩されても、キリストと共に復活へ達する真の希望(3:10~11)。

土の器 碗もあれば皿もあり 鉢もあれば甕もある 注がれるキリストの栄光 それゆえ捉え難い少量でも役に立つ皿 分かち合いに備えて保存する甕 キリストの栄光は量ではない 質でもない
次主日 8/6 は役員会そしてカレーの日です。8月には第二土曜日(集会所)と第四月曜日(YMCA)の聖研は夏休み。第四水曜日の聖研・祈祷会は開きます。8/11(金祝)1時~分区社会部平和集会(勝沼教会)。

礼拝堂・集会所の住所：408-0012 山梨県北杜市高根町箕輪 2265-3

連絡・問い合わせは牧師へ：408-0205 北杜市明野町浅尾新田 1324 TEL 0551-25-4008

メール komechan.olive@orange.zero.jp HPは「日本基督教団八ヶ岳教会」で検索して下さい。